

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
おかげさまで今年は創刊24年目
創刊1989年 No.280

GEKKAN-WIEN 2012年10月号





杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 13



九月七～八日に中国の北京において、上海交通大学、韓国科学技術院、及び東京大学の共催、国核原子力科学技術研究院の主催、IAEA（国際原子力機関）の協力により、原子力安全とシビアアクシデントに関する国際ワークショップが開催された。福島事故を契機に原子力安全とシビアアクシデントへの関心が高まったことから、世界の専門家が集まり、先進的な安全システムやシビアアクシデントの影響緩和システムに関するアイデア、研究成果、及び設計経験について情報交換し、関係機関との協力を強化して、今後の研究の方向性を見極めることが目的である。十六ヶ国から約百五〇名の参加があり、我が国からは筆者を含む十六名が参加した。十四のセッションで六五件の報告があり、二十七件のポスター発表があった。

スウェーデン王立工科大学のセガール教授、米國ウイスコンシン大学のコラティニ教授を始めとして、シビアアクシデントを中心に世界中のトップ研究者が集まったため、会議の発表、質疑応答、パネル討論の内容は充実したものとなった。中国の大学から多くの若手研究者や学生が参加したことも特記される。筆者は日目午後、最初の技術セッションの共同議長を務めた。共同議長のもう一人は、筆者が



原子力機構の炉心損傷安全研究所長時に中国からの特別研究員として三年間滞在し、上海交通大学副学部長から現在は北京にある国家原子力ソフトウエア開発センター長を務めている。ほぼ同時期に研究フェローとして同研究室に三年間滞在し、現在は韓国浦項工科大学教授も他のセッションで共同議長を務めた。また、パネリストを務めた筑波大学教授は、別の研究室で筆者と同室だったこともあり、かつこの研究仲間と再会できたのも個人的な特記事項である。

さて、今のウィーンと京都の共通点では、言葉の訛り振りを紹介したい。ドイツ北部の標準ドイツ語が二語語きつちりと発音する関東弁のように硬い感じなのに比べ、ウィーンのドイツ語は、sの音がrの前以外では濁らないなど、全体的に柔らかく流れるような印象がある。まさに京都弁のようなはんなり感があるのである。IAEAに三年間勤務したドイツ語に詳しい知人によれば、「テレビでオーストリア放送協会のアナウンサーが話すウィーン弁のニュースは京都弁そのもの」とのこと。京言葉は御所で話された御所言葉と街中で話される町ことばに分類されるが、今や伝統的な京言葉を使うのは高齢層や花街の芸妓社会などに限られると言



う。それでも、京都人の話し振りは、人や動物に対しても「いては」と言ふなど、一般の関西弁とは明らかに違う点がある。両市の言葉の訛りはそれぞれ長い歴史と伝統に根ざしていると思うが、その頭れ方が似ているのが興味深い。余談であるが、昭和四十四年、筆者が札幌の高校を卒業して京都で下宿生活を始め、洗濯機の使い方を下宿の小母さんから教えて貰った時「水をほかしてもろて」と言われ、「水を捨てる」の意味と分かるまで暫く時間を要した。ウィーンでは「こんには」は「グライテンターク」でなく「グリュース・ゴット」と言うことを事務所の秘書から聞き、すぐにあちこちで使った。ウィーン市庁舎前広場で夏場に開催される音楽映画フェスティバルでは、会場周辺に世界各国料理とドリンクが楽しめるスタンドが並ぶ。注文する時や隣の人に「グリュース・ゴット」をよく使った関係で、そのスケッチを掲載させて頂く。

参考 河野純「著『ウィーンのドイツ語』

■杉本純 京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長■